教育長	教育部長	課長	指導主事	課長補佐	主査	係	保存区分
							永・10 5・1

平成30年度第１回大口町総合教育会議

平成３１年　３月１９日
午前１０時００分　開　議
大口町役場3階　第5委員会室

１　開　　会

２　町長挨拶

３　教育長挨拶

４　報告事項
　新生大口中学校の10年を振り返って

５　その他

６　閉　　会

構成員

町長	鈴木雅博	教育長	長屋孝成
教育長職務代理者	藤田金生	教育委員	丹羽茂文
教育委員	鈴村由布子	教育委員	水谷惠子

町長部局

総務部長	社本　寛	政策推進課長	吉田幸弘
政策推進課主査	村田直樹		

教育委員会

生涯教育部長	平岡寿弘	学校教育課長	倉知千鶴
学校教育課主幹兼指導主事	天野拓夫	学校教育課長補佐	兼松昌史

（午前１０時００分）

１．開会

○吉田政策推進課長　では、始めさせていただきたいと思います。

始める前にお手元の資料の確認をお願いいたします。まず次第、出席者名簿、資料といたしまして大口中学校10年の検証報告書、よろしいでしょうか。ございますでしょうか。

ありがとうございます。もし足りない等ございましたらお申しつけくださいませ。よろしくお願いいたします。

それでは、ただいまから平成30年度第１回大口町総合教育会議を開催いたします。進行を務めさせていただきます政策推進課の吉田でございます。よろしくお願いいたします。

本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の４第６項の規定によりまして原則公開となっております。また、会議の内容については、会議終了後、資料及び会議録とともに町ホームページに公開させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日、傍聴人はございません。よろしくお願いいたします。

２．町長挨拶

○吉田政策推進課長　では、初めに、この会議の主催者であります鈴木町長より挨拶をいただきたいと存じます。どうぞよろしくお願いします。

○鈴木町長　それでは、改めまして、皆さん、おはようございます。

きょうは、早朝より御出席を賜りましてありがとうございます。

教育という部分の中で一番大切な指針を皆さんに決めていただくというのか、これからの変わり行く学校教育に関するいろんなことを皆さん方と御相談を申し上げながら進めてまいるということでございますが、まずもって、ことし、大口中学校がセンター方式に変わりましてちょうど10年ということであります。センター方式がどうだというわけではなく、何となく漏れ聞くお話の中には、大口中学校の学力が大分低下しているんじゃないかなというような話も漏れ聞くところである、そして決してセンター方式がいいとか悪いとかというわけではなく、やはり子供たちが今のそういう方式に対して順応できているのかというところも、やはりこれから教育委員の皆様方に御審議、御協議を賜らなければならない一番重大なことではないのかなというふうに思っておりますのと、またこれから小学校から、たしか来年度ぐらいから英語が出てくる、そしてまたプログラミング教育も入ってくる。そんな中で子供たちが覚えなければならない、学習しなければならないことというのは山ほど盛りだくさん出てきている。そんな中で、これから子供たちの健康と精神面に関して、我々として、大人としてどういう対応をしていったらいいかということも今後考えていかなければならない、本当に重大なことなんでは

ないのかなと思っています。

そしてまた、豊田市では、この間、２人の女の子が卒業前に亡くなったという事例もあります。学校の子供たちの中でどんなことが本当に起こっているかということがわからない。本当にいじめなのか何なのかということもわからない。ただ、けんかをしたからというような部分もあるという話も聞いてはおりますけれども、本当にけんかだけでそこまでいくのかなというような、我々の子供のころの小学校６年生というと、まだ本当に子供でありましたし、そんなことも全然考えたこともなかったですが、やはりいろんな日本という国の中で起きる環境の中になかなか順応できない子供たちや、そして割とコミュニケーションがとりにくい子供たちがだんだんふえてきているということもやっぱり大きな問題ではないのかなということを考えています。

極端なことを言いますと、昔は学校から帰ってかばんを家に置いたら、そのままどこかの公園というか、僕らはお宮だったんですけど、お宮へ行ってみんなで遊ぶ、年下から年長の子までみんなで一緒に遊ぶ、その中でいろんな意味でのコミュニケーションがずっととれてきた、そういうこともあります。

そういう中で、今後の本当に子供たちの学力をどこまで上げていくのか、そして大口町には中学校は１校しかありません。そういう中で、評価そのものが大口の評価になってしまうということも少なからずあるんではないのかなということを考えますと、いかに子供たちの学力の水準を全体的に底上げをしていかなければならないのかということも、本当にこれから考えなければならない重要な時期に入っているんではないかなあと思っておりますし、この30年度は別として、31年度ぐらいからは外国の労働者の皆さん方が日本に入ってきて、またこの大口町にも多分入ってみえると私は察しておりますけれども、この間テレビで見ておりましたら、本当に子供さんがいるにもかかわらず、学校に通っていない子供さんたちがいる。これはもちろん外国から日本に一緒に来て、子供たちがいるから、自分の兄弟がいるから、上の子が下の子供の世話をしながら学校にも行かずというような状態が結構あるというような話も聞いて、僕も本当にちょっとショックを受けました。

そういういろんな業態や、それぞれの家庭のいろんな事情によって、子供たちが勉強ができない、勉強というか学校に行けないという子たち、そして言葉がわからないから行けない、環境に遭遇できないというようないろんなことがありますので、そういうものもどう考えていくのかということも考えなければならない。

ほかに、今、大口町として皆様のお力をおかりしながらサポートルームさくらを運営しております。その運営をする中で、子供たちが学習をどうしていくのかということも、本当にみんなが力を合わせて今やっていただいておりますし、ほとんど余り欠席をされる子供たちも少な

いということは、そこをやめて自分でやろうというよりも、そこに来ることが勉強だというような形で従事している子供たちがたくさんいるということになりますと、今のサポートルームさくらの大きさでいいのかとか、そういう意味でいう教員の皆さんの不足ということはあるかもしれませんけれども、そういうのが本当に町でやるというよりも、これからはやっぱりボランティアの皆さん方にもお任せをしていかなければならないかとか、いろんな方向性がこれから物すごく大きく変わっていくような気がしてなりません。

ぜひ、そういう意味で教育委員の皆さん方にいろんなアイデアを、そしてまたお知恵をお出しいただいて、少しでも大口町の子供たちが本当に勉学に親しんでくれて、将来、この大口町を任すすばらしい子供たちが一人でも多く出ていただけるように、これからも皆さんとともに努力をしてまいりたいというふうに思っております。

何分にも山積している問題ですので、この御挨拶の中でお話しすることはなかなか難しいかもしれません。委員の皆さん方もそれぞれの思いがおありだと思いますし、またいろんな角度から見ていただいた教育という問題をこれから皆さんの中で話し合いをしながら、少しでも改善できるような形をとってまいりたいと思っておりますので、きょうは余り時間もないという話も漏れ伺っておりますけれども、御協力のほど心からお願いを申し上げて、ちょっと長くなりましたけど御挨拶にかえさせていただきます。よろしくお願いを申し上げます。

３．教育長挨拶

○吉田政策推進課長　ありがとうございました。

続きまして、教育委員会を代表して、長屋教育長より御挨拶を頂戴したいと思います。お願いします。

○長屋教育長　改めまして、おはようございます。

鈴木町長におかれましては、３月議会の真っ最中でありまして、何かと大変御多忙な中であるところ、総合教育会議を開催していただきまして本当にありがとうございます。

また、教育委員の皆様におかれましては、本日、会議が続きますが、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、地方教育行政における責任の明確化とか迅速な危機管理体制を構築する、そして町長、市長、首長との連携強化を図る、そういう狙いで地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正がなされまして、これで４年を経過するわけでございます。とりわけ、危機管理体制の構築という面におきましては、現在も相変わらずいじめによる重大事案が全国的に発生をしている中で、本町でも条例をつくり、町で条例をつくっているところは余りないわけですけれども、条例を整備したり、規則を整備したり、いじめ問題対策連絡協議会を機能させたりして、

またいじめ防止のための基本方針を毎年点検しつつ今日に至っておりますが、これも総合教育会議が開催されたことの波及効果ではないかなあと思っているわけであります。

家庭教育から学校教育、生涯教育全般にわたりまして、教育委員会の管轄範囲は大変広大であるわけでありますし、またそれぞれの領域において今日的な課題も山積しているわけでございます。きょうは本町の教育につきまして、町長と協議を重ねる中で、大口町の教育の今日的な課題解決の糸口がつかめればなあということであります。短い時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

４．報告事項

○吉田政策推進課長　ありがとうございました。

それでは、次第に基づきまして、４．報告事項に入ります。

議長は、大口町総合教育会議運営規程第３条に会議の議事進行は町長が行うとなっておりますので、町長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○鈴木町長　それでは、議長を務めさせていただきます。

早速、報告事項、新生大口中学校の10年を振り返ってに入ります。

説明をお願いします。事務局。

○天野学校教育課主幹兼指導主事　会議資料として配付いたしました大口中学校10年の検証報告書について報告・説明させていただきます。

本報告書は、中学校10年の検証を行うというミッションを受けて作成したものであります。本報告書を作成するに際し、学校教育課としてさまざまな観点から検討してまいりました。

初めに、44ページをお開きください。

ここには、44ページには、本報告書作成までの経緯が記してあります。①教育委員会事務局として９回の検討会議を行ってまいりました。この検討会議には大口中学校長も常に出席し、現場の教育活動の意図や目的の確認、改善方策について、その成果と課題について洗い出し作業を行いました。

⑤教育委員を交えてとして、教科センター方式の先進校の視察を行い、その後、視察をともにした教員と教科センター方式についての意見交換を行いました。

こうした中で、私たちは２つの事柄について気がつきました。１つは、中学校の活動には大きな成果があるにもかかわらず、その広報が不十分であり、保護者や地域社会に伝わっていないこと、２つは、中学校にはさまざまな課題があり、保護者や地域住民の不安の声が寄せられているということです。

本報告書はこうした中で、中学校のことを知ってもらいたい、疑問や不安の声に対して耳を

傾け、払拭していきたい、このような思いを抱いて作成いたしました。

表紙を１枚はねた目次ページをごらんください。

第１章は、大口中学校とはどんな学校ですかという問いに答えるべく、１．教科センター方式の学校である。２．ブロック活動が盛んな学校である。３．大口町の生涯学習活動の拠点であることについて、中学校の特色を定義いたしました。

第２章は、大口中学校のうわさ話に答えますと称し、保護者や地域社会から寄せられる疑問や不安の声を問いに掲げ、その一つ一つに答えを用意しました。

私たちはこうした検証をする中で、客観的データとして生の声を把握することが重要だと考え、全校生徒並びに教職員に対してアンケート調査を行いました。

47ページをごらんください。

ここでは、７つの項目についてアンケート調査を行っています。このアンケート調査を行ってわかったことは、教科センター方式やブロック活動には大いなる理想や願いがある一方で、実際の取り組みの中では、その理想と現実にはギャップがあるということです。

こうした検証作業を踏まえ、この10年間の成果と課題をまとめました。

33ページをお開きください。

ここには、教科センター方式について、４つの成果と５つの課題を洗い出しました。また、次ページの34ページには、ブロック活動の成果と課題についてまとめてあります。私たちの検証としては、教科センター方式は教科の学習に最適な学習環境を提供すべく採用している方式であるが、教科教室や教科ラウンジの環境づくりなどが不十分であり、生徒が教室移動しての効果を得る実感には至っていない現実があるということです。

その理由は、33ページに記す課題の①から⑤にあると考えています。

最後に、第４章として、今後の10年の展望として、５つの指針と10個の具体目標を述べています。

41ページの下段に記載するその２をごらんください。

中学校の責務として、学力保障の問題を避けることはできません。学力の保障について、どのように手を講じていくのか。それには慣例や当たり前を見直すほどの決意を持って、子供たちのためにどうするのかという視点で、学校、保護者、地域社会が一丸となって教育活動に当たっていく必要があると考えています。

以上、検証報告書についての説明を終えさせていただきます。

○鈴木町長　ありがとうございました。

今、事務局からの御説明がございましたが、委員の皆さん方からは忌憚のない御意見をいただければと思っております。

ちょっと資料が皆さんの手元に回って、まだ目を通してみえないかもしれませんけれども、見ながらで結構ですが、今思ってみえることをもしございましたら、御発言をお願いしたいなあというふうに思っておりますが、藤田さん、いかがですか。

○藤田教育長職務代理者　こんなことかなと思うんですけれども、大口中学校のことに限らず、教育の目的が何であるかといって、人格の形成ということだと思いますが、ここでいろんな主体という言葉も出てきますし、生涯学習という言葉もずっと出てきます。人格の完成というところで、人間が生まれてずっと育ってくる段階、いろいろあると思います。マズローの欲求階層についてもいろいろありますし、そんなものを全部充足していって人格ができてくるということだと思いますが、その人格の形成というのは、中学校の段階で完結するものでもないと思いますし、生涯にわたってずうっと続けていくんだと思います。成長のあれも違ってきますし、一人一人の子が。

ずうっと育っていって、社会へ出ていってもずうっと育っていく、だから生涯にわたって学習するという言葉が出てきたんだろうと思いますが、実際、大口中学校の取り組みにちょっと触れますと、学力とは別にブロック学習がずっとありますけれども、異学年、１、２、３年生が集まって自治的な力をつけているわけですが、ずうっと人間が生涯にわたって育っていくときに、自治的な能力とかそういうものをどういうふうに育ててあげるかという実践の場をブロックの中で子供は学んでいるんじゃないかなと。意図的に小学校の段階でこういうものを取り入れても、小学生にはなかなか吸収されませんが、中学校ぐらいの段階だったらできてくるんだなあと思います。

そのブロックの中で培った力は、非常に今後役立つんじゃないかなあと思っていますが、昔の話をしてちょっと恐縮なんですが、いろいろ学習指導要領が変わってきまして、40年代に特別教育活動ができて、50年ぐらいに特別活動が出てきて、そのときを思い出すと、そこの中に入ってきたものが学級活動とは別に学級指導というのが入ってきた。もう今は消えていっています。消えておるような感じですが、その学習指導を実践していく中で、何を一番狙ったかといったら、ここら辺の力ですね、社会に出てどういうふうに役立つか。だから、学級活動で話すだけじゃなくて、そこの中に目的があって、どういうふうにしていきたいか意図的なものを持って学級指導というものが出てきている。それも、時間数の関係でだんだん減っていってしまいましたが、そのときに始まったのが主体的というような言葉だったと思いますが、ここにもたくさん主体的という言葉が出てきます。主体的な人間というのは、ある程度まで人格が完成された人間だと思います。主体的なという言葉の中には、自分の意思で決めること、能動的とかいろいろありますが、大切な要素として実践的という言葉が含まれておる、実践的でなければいけないということが含まれておるような気がする。

このブロック学習ですか、実際３学年が集まって、そこの中で年齢が違う子たちが自治的な、本物の自治でないかもしれません、その練習かもしれませんが、かなりできる段階の子たちは、そこでそういうものをやりながら実践的な力を育てておるような気がするんですが。うまくまとめることはできませんけれども、ブロック学習が実践力を培う場になっておるんかなあ。

学校としての捉えは、総合的な学習の中で捉えられているように思いますが、特色あるそういうものでぱっとやっていく、それは先々に実践力に培われた主体性ということで、将来、大人になったときに役立ってくるんじゃないかなあと思うんですが。

実際、今、町内にも自治的、自治組織があるんですが、自治という言葉は今の大人はいつ使ったかといって、小学校で児童会で、中・高で生徒会で、大学へ行って自治という言葉を使ったかもしれませんが、年齢が高いところにはなじみがないですね。そういうものが小さいとき、中学生ぐらいから実際のものとして取り入れられていくことは、人格の形成の中では大切なことだと思うんですが、それだけが中学校ではないですもんで、それがどういうふうに持っていくかということは課題でたくさんの載せておってもらいますが、いろんなことがあっち行ったり、こっち行ったりしておりますが、ブロック学習というのは非常に人間の成長に役立つ、それが実践力を培う場になっておるというような気がします。

ただ、学力の問題が先ほどから冒頭出ておりましたが、何を持って学力かというのはいつも曖昧な部分になりますけれども、一番大切なことは先生方の教材の分析力でしょうし、どれだけ同じ教材を分析できるか、分析力でしょうし、カリキュラムへの挑戦があるかもしれません。大口の学ぶスタイルも僕はおもしろいな、いいなと思っておりますが、授業改善の一番最初に出てきたときは、そんなことを言っちゃいかんですが、授業の効率化が出てきたんですが、だあっと課題を与えてばあっとやる授業から、どれだけ導入段階で子供が課題意識をつかむか、それによって効率を上げてくるという手法がぱっと出てきたような、一番スタートだったような気がしますけど。済みませんね、長くて。

僕はブロックがいいと思うんです。教科のあれについては、先生方の教材分析力を高めてほしいということを思うんですか。

○鈴木町長　今、センター教科方式、ブロック方式という話でありましたけど、皆さん御指摘されたんで、この間の卒業式のときに卒業生がブロックの活動については、ぜひ大口町としては残してほしいというような話もあったのも事実ですので、子供たちが自分たちの中で目上、年下を意識する中で、いわゆる先輩、後輩という形がどんどん形成されていくことは、我々にとっても大切なことではないのかなあということは十分わかっておりますので、いい部分はいい部分で残し、ちょっとどうかなと思う部分はまだ改革をしていくという方向性が一番正しいんではないのかなあということを思っております。

水谷さん、もう卒業されましたか。

○水谷教育委員　はい。

○鈴木町長　ですよね。でも、一番近いですよね、年齢的には。

○水谷教育委員　はい。

○鈴木町長　そうですよね。やっぱり現実に子供さんたちがどういう観点で見ていたのかということを、それぞれ人間には学力のいろんな問題で上・下あると思うんですが、一般的な話として今のセンター方式、今のブロック方式、そういうものに対して子供はどう考えているかって、僕、正直言って余りわからんのですよね。ちょっとその辺のところを教えていただけると、子供の観点からお願いできるとありがたいかなと思いますけど。

○水谷教育委員　ブロック活動に関しては、実際にここにもあったんですが、ブロック制を取り入れるに当たって、生徒会長とかそういうものをなくしてでもブロックをということが、最初にブロック制をつくるに当たってということが書いてある資料をいただいたんですが、高校の入試のときに、ブロックとは何ですかとか、ブロック長とは何ですかということを面接で聞かれたそうなんです。それに関しても、ブロック長というのはとか、ブロックというのは７つありましてとか、それぞれのブロック長がみんな生徒会長のそれぞれの場面でそういう役割を果たしているんですということを説明したそうです。

それで、ブロック長になって、責任を持ってそれぞれのブロックから出た６人が皆さんのリーダーになり、いろんな活動を行ってきたわけですが、生徒たち自身がみずから動くということをすごく大切にそのころはしていたので、そんなに先生に負担があったのかなあ、影の力で先生が動いてくださっていたのかもしれませんが、みんなで相談しながら、みんなの力でブロックをつくり上げていくということでやっていたような気がします。給食の時間もブロック長が集まって、ランチをしながら会議みたいなこともやっていたということも聞きました。

教科センター方式については、ここの資料にもありますように、いいところはそのまま、自分がそれぞれの教科の教室に行くということで、自分がその教科を勉強する気持ちになっていく。それぞれの教科の部屋に行くことによって気分転換が図れて、それぞれの環境で勉強できることがすごいいいところだって、卒業した後もそれぞれ事あるごとに聞きますとそういうことを言ってくれていました。

生徒たちは順応性があるので、最初は戸惑うかもしれません。小学校６年生から中学校に上がってきたときには、トイレはどうするのとか、ここにもあったように戸惑うかもしれませんが、それなりにちゃんと１カ月後にはなれてやって生活していけていると思うので、その辺の心配はないかと思います。

それとは別にいつも思っていることですが、ちょっと広報が不十分と天野先生が言われたの

ですが、ホームページを見ますと、日ごろから多くの授業風景や部活動に取り組む様子、またブロック活動の様子などが、学校での活動がよく保護者の方に伝わるように何枚も何枚もアップされているので、先生たちの一生懸命な思いや子供たちの一生懸命な様子は保護者には伝わっているかと思いまして、家庭でも親さんがホームページを見て、共通の話題の一つになっていることと思います。我が家がそうだったので、きょうこんなことがあったんだねということが共通の話題になりました。

これを見て日ごろから感じていることで、教科ラウンジの活用ということで、今後の課題ということにもなっていたんですが、ブロック活動の場として使用されていることも多いので、なかなか全部が全部展示したりとかするようなスペースはとれないかとは思うんですが、先生方や教科委員とかの工夫により、もう少し魅力のある教科ラウンジづくりにするとよりよい環境、それぞれの教科のスペースができるんじゃないかと思います。

○鈴木町長　ありがとうございます。

今の水谷委員からお話があった話をお聞きするのと、いわゆるここに出てくるデータとを見比べると、本当に僕らはその場にいませんので正直言ってわからないんですけど、どっちなんだろうという部分、このアンケートをとった中で、例えば授業、教室を移動するのは大変かという話になると、全校生の約70％ぐらいが「どちらかというと大変」「とても大変」という部分になっている。職員もやはり同じように、80％近くの職員も大変だ、面倒だというようなことが出ている。そして、教室を移動することによって学習する意欲が湧いてきますかというのは、全校生徒の80％が「あまり思わない」「全然思わない」というアンケート、もうちょっとショックなのが、職員が、これも約80％を超える人たちが、逆に言うと学習する意欲が湧いてこないととったほうがいいのかというような部分の数字になってくる。お互いに学生も、いわゆる教職員も、今の話で移動したりとかそういうものに対する、言い方が悪いかもしれないですけど、多少嫌悪感がどこかに隠れているのかなというアンケートになってくるわけですよ。

今言われるように、この方法がいいという子はいるんです。ただ、全体の意識からいうと、このアンケートを見る中でどうなのかねというところがやっぱり、これは表に出ていないということなんでしょうけど、その部分がいわゆる保護者の皆さん方の不安やいろんなものに対する感情になっているんではないのかなあ。

ただ、我々もセンター方式は大学のときしか受けていないんでわかりませんけど、現実にはどういうことが行われているのかがわかっていないという部分があるので、余り知ったかぶったことは言えないというのもあるんでしょうけど、でも、問題は教職員の皆さん方が、僕はふと、この間から一つ思っていたことが、天野君に聞くんだけど、ほかのこの周りでセンター方式を取り入れている学校はないよね、例えば尾張管内か丹葉管内か。ということになると、先

生たちが異動する中で、先生たち自身がセンター方式に対する考え方というのが本当に出ているのかなあ。もっと言うなら、そのためのセンター方式に対する勉強の教え方に対するレクチャーとかいろんな研修だとかというものを本当に受けてきていただいているのかなというところに、僕はちょっと戸惑いを感じる部分があるような気がするんですね。

だから、先生が悪いというわけじゃなくて、現実に研修を受けていなかったら何をするのという、異動する時間は２週間ぐらいしかないよね。次に移るときに、本当に学校の先生たちが教科のやり方についての理解というのは、率直なところしてみえるんだろうか。

○天野学校教育課主幹兼指導主事　御指摘のとおりの問題点があると思います。ただ、異動というのは、そこの学校に行って、そこの学校文化の中で学びますオン・ザ・ジョブトレーニング、やりながら、走りながら学ぶというところだと思います。現実がそういう中でやってきているんですけれども、町長御指摘のとおりの課題があると思います。

○鈴木町長　先ほど藤田さんが言われたみたいに、生涯学習の中でやっていくのはもちろん大切なことなので、それが今度逆によその学校へ行って、よその学校でフィードバックされていれば僕は何の問題もないと思うんだけれども、短期間の間の実習というのは、どう思われますかね。学校の先生自身がセンター方式に対してなれていない段階で何を教えていくかという、我々が大学のときにそうだったんですけど、よくあったじゃないですか。大学の教授が勝手にしゃべっておって、我々は何か変なもの、いろんなものを見ておったりとか進んでいってしまう、要するに、いわゆる学校の教育という意味で教えるという中で、どっちかというと先生の自己満足的なところがあったことも事実としてあるんで、それがどうなのか、本当に子供たちがわかっているのかねというところに目を向けていけているのかなあというところが僕としてはすごく不安な部分なんですね。

今、水谷委員が言われたように、わかっている者は、それをうまく利用して勉強しているというのは、聞いてわかっているんですよ。学校の担任じゃないんだけど担当の先生のところへ行って、これどうなの、教えてと言って行く子もいる。でも、このグラフというかアンケートを見ると、本当に80％ぐらいの人たちが、どちらかといえばという部分が出てくるという、そうすると学力に物すごく大きな差が出てくるんじゃないのかというのは、我々としては考えざるを得ないのと。もっと言うなら、そうすると、先ほど言われる底上げが本当にできるのかねということをやっぱり見直さないと、一回みんなで本当に忌憚のない意見を出し合って、批判をするわけじゃなく、賛同するわけでもなく、やっぱりこの形が本当にいいのかということをちょうど10年たった中で検証をしていかないと、このまま続けてしまって、また10年後となると、この20年間、いわゆるゆとり社会だって、ゆとり学習だって言われた子供たちがという今話題になっているという子供たちを大口町からもつくってしまいかねないというところが、今

僕が本当に一番不安に、自分が首長として皆さんの大口町を任されている中で一番不安に思う部分、もっと言うなら、これだけ環境がどんどんいろんな意味で変わっていく中にあって、その環境に順応できているのかというところが僕は物すごくいろんな意味で不安に思う部分があるんですよね。

企業がこれだけたくさんあって、じゃあ、大口の子供たちが、町内の大企業に就職できているのかということになると、ちょっとそこら辺が疑問点のところも、もちろん、そこを目指しているかどうかはわからないんですけど、よく教育長が言うみたいに、大口の子供は大口で育てるんだ、もっと言うならば、そこに帰ってきてほしいという感覚を皆さん持ってみえるんですよ。でも、それに対応できるだけの勉学をきっちりできているのかというか、満遍なくとは言いませんけど、少しでも底上げができる体制をやっぱり今後考えていかないといかんのじゃないかなあというのを私は個人的に思っています。

丹羽さん、どうですか。今は、大口の子供は従業員の方で誰かお見えになりますか。

○丹羽教育委員　いません。

○鈴木町長　見えないですよね。本当にやっぱり会社として実績を上げてみえる会社に、割と大口の子が少ないというのが現実にあるんですよね。そういうところが、生涯学習の中でいろんな勉強をしてくれるだろうということを当てにしてやっている、もっと言うなら、どっちかといえば戻ってきてほしいというのを町の魅力とちょっと違うところが僕は何か淡々として、大学だったら、言い方は悪いですけど、先生とそんなに仲よくなる必要性もないかなということでしょうけど、いろんなことを教えてもらっていた、我々の時代の中学校や小学校の先生たちと、今のセンター方式の先生たちとのコミュニケーションが本当にできているのかなというところって難しい、もっと言うなら、成績の悪い子に限って、学校も余り先生に近づきたくないという部分も私はありましたんで、僕は成績悪かったんでありましたけど、そんなのはどうなのかねというところにいろんな意味でのクエスチョンマークがたくさん出てくるんですけど、皆さん、頭がよかったんでそんなのはないですよね、あんまり。

○丹羽教育委員　ちょっと意見、いいですか。

アンケートを見させていただいて、こういうふうになるのは当たり前だなと思うのは、やっぱり公立の中学校なもんですから、私学と違ってバックになる経済環境もばらばらだし、学力も、もうピンからキリまであるし、いろんな子が集まって、そして教育の本心はなるべく落ちこぼれのない、底上げをしようという教育をやるのが公立の中学校の中で、こういう結果が出るのは当たり前だなあと私は見させていただきました。

それと、教科センター方式がいいのか、ブロックがいいのかというのは、サプリメントか漢方薬と一緒で、それじゃあ10年前に戻って、このサプリメントを飲むのをやめたら膝が痛くな

らなかったのかどうかの検証は非常に難しいですね。だから、10年たって見直すというのは難しいなと思うんですけど、この本をずっと見させていただいて、例えば教科センター方式のせいで、ブロック活動のせいでという何かネガティブな面を捉えて、そうではないですよという答えというのがこの本の中の流れに見られるんですけど、やっぱり教科センター方式のおかげで、毎日ちゃんと朝、歩いているおかげで健康が保たれている。このサプリメント、漢方薬を毎日地道に飲んでいるおかげで股関節が痛くならない、階段がちゃんと上れるという、ブロック活動のおかげでという広報をしないと、こういうふうにうわさ話は、基本的にはいいうわさもあるはずですから、動くことによって気分転換ができて、今まで余りわからなかった数学をやっていたけど、何を先生が言っているかわからないけど、また歩いて気分転換して、今度、理科の教室に行こうとか言って、実験が好きだからという、この気分転換ができるよといういい面もあるよというのは、ここに本当に載せてほしいなという、うわさ話の中にね。

うわさは悪いうわさばっかりじゃなくて、ポジティブな後押しをするようなうわさもあるはずですから、そのとおりですという答え、これを見ているとアンケートもうわさ話もネガティブに走って、それを否定して、そんなことはないですと。基本的には、生涯学習の拠点として大口中学校を掲げた以上、この手段として教科センター方式、ブロック活動を取り入れて、地域の生涯学習の拠点にしますと、これはわかるんだけれども、そういう拠点にする目的と手段はきちっとしていますということによって、それを広報するために、ちょっと天野先生にけちつけて悪いけど、ネガティブなうわさを拾ってきて、アンケートのネガティブさを拾ってきて、そんなことはないですというのはちょっと問題がないかなあと。

こういうのってめちゃくちゃ難しいんです。さっき言ったように、戻ってサプリメントをやめたというわけにもいきませんし、ブロック活動をやってきた以上、拠点として目的を据えた以上、じゃあ、もっといいほうに持っていく、それから、さっき私学の話をしたんですけれども、町長も言われましたけれども、先生も私学と違って公立の中学校は異動がありますから、せっかく教科センター方式になれたと思ったら、布袋中学校へ行っちゃったと。何とか中学から来られた方は、えー教科センター方式って。異動もなくて、学力も入試があって平均化して、経済環境もバックも大体授業料が払えるあれがそろってという私学じゃないものですから、こういう難しい条件をそろえた中でブロック活動どうのこうの、教科センター方式いいんだろうかとかというよりも、こうやって決めた以上は、これをどうやっていいふうに、近隣の町でやっていない斬新な教育だと思いますから、これを上手に使って私学並みにというか、公立中学校の教育環境というか、教育方法を変えるようなことに努力したほうが、戻るわけにいかんですからね。

何か、誰だってわかっていればいいですよ。こんな大酒飲みのせいでとか、これだけたばこ

を吸ったせいでがんになったというのは因果関係がわかるんだけれども、教科センター方式のせいで、ブロック活動のせいでといって、何かそれを求めて、それを今度は否定するような、そんなことありませんよという広報よりも、もうちょっとよいしょして、ちょっと盛ってもいいもんですから、みんなが大口中学校の教科センター方式、ブロック活動を支援するようなムードづくりにするにはどうしたらいいだろうかという検討会議を開いていただいたほうが僕はいいなあと思うんですよ。

少子・高齢化ですから、少子ですから一人っ子というのがいっぱいおる中で、お兄ちゃんもお姉ちゃんも妹も弟もいない一人っ子がやっぱりブロックの中で面倒を見てやるとか、面倒を見てもらうというのを社会に出る前にいろいろ経験するのは非常にいいことで、今、都市部のちょっと進んだ幼稚園はほとんどブロックで、年長、年中、年少をまぜて、ちゃんと御飯のときは年長さんがランチョンマットを敷いてあげて、曲がっていたらちゃんと真っすぐにするのよと、私も何年も大口の南保育園に２日ぐらい、朝からずうっと親が来れないからかわりに行ってと、また今度、名古屋の幼稚園に行って、ブロックのところに行って、母親が来られないし、お父さんも来られないから、じいじ行ってくれといって、１日とか２日行ってきましたけれども、ブロックってこういうことなんだなあと思って。先生に聞くと、あの子は一人っ子ですかと言うと一人っ子って、よく面倒を見ていますねと言って、そういう経験って大口中学校はいいと私は思いますね。幼稚園を見ていてそう思いました。ブロックって、これから少子化の中でいい教育だなあと、さっき水谷さんが言われたように、と私は思いますので、教科センター方式、私もいいと思います。

○鈴木町長　委員の皆さん方の御発言だけじゃなくて、現場にかかわっている職員の皆さんでもし意見があれば言ってくれて構わないと思うんで、ぜひ聞かせてほしいなあって。

決してブロックというか、教科センター方式というものを否定するわけではない。僕はこの間ふと思ったのは、教科センター方式を改良するというか、最初つくった、今、丹羽さん、主事もおっしゃったんだけど、いろんな部門で、例えばホームルームは組というか学年というか一組一組でやっている、そこの部分でそういうものを教えたりとか、全てをブロックというかセンター方式に変える、センター方式から全部を変えるというわけじゃなくて、いい部分だけ残して悪い部分を取り除いて、またどうしていくということを考えていかないといかんのじゃないのかなというのと、もう一つ言うなら、これは全く違う観点で、せっかくブロック、センター方式の形をとってつくった学校を通常のいわゆる公立の中学校に変えようと思ったら、また莫大な費用がかかっていくということも、正直言って財政面ではあります。

だから、うまくその辺のところができるようにならないと、これはだめだから新しいやつに変えるなんてことは、正直言って難しいというのも事実だと思っていますので、個々のいろん

な意見というのをきょう皆さん聞いてくれて、今ネガティブな部分といい部分という話でいくなら、いい部分は何があるかという、今度、天野君のほうで、またそういう意味でのアンケートはとってもらわないと。これは全体のアンケートだよね。いい悪いというアンケートはここにはない。全体のアンケートとして出ている。だから、今、さっき丹羽さんが言われるみたいに一方的な感覚というか、そういう方向性、裏面があるんじゃないのというのは、やはり我々が多分、誰も知らないことだと思うんだよ。だから、知らない部分をどうあからさまにしていくかをやっぱり検証していかないと、もちろん10年目だから次どうするかという、短期間でこんなことは多分不可能だと思っているんで、それぞれの教育委員の皆さん方にもいろんなところを見ていただいて、やっぱりそういう、さっき言われたブロックがよかったという話もあるんで、逆に言うなら、大口中学校の中はどうなのというところって、年に１回ぐらいは見に行かせていただくんだろうけど、みんなが多少見てくれないと僕はいかんのじゃないかなということを思うんだよね。

だから、首長で申しわけない話なんだけど、いい悪いという判断がなかなか正直言って僕自身もできません。見たこともないし、全然そういう経験がないんで。

ブロックは皆さんもないですよね。丹羽さんもないですもんね。水谷さんもないですよ。センター方式ってありますか。

○水谷教育委員　自分がですか。

○鈴木町長　ないですもんね。鈴村さんもないですよね。本当にこれ、知らん者がこういう話をしておって、いい面、悪い面と言われても本当に出てこないんですよ。

○水谷教育委員　先ほども言ったように自分が経験したことはもちろんないんですが、子供たち、３人いますけど、やっぱりいい意見を言ってくれるので、私はいい部分しかという、うちの感覚だとそうですね。

○鈴木町長　そうですよね。だから、本当に親御さんが子供から聞いた話のアンケートもとったっておかしくないと思うんだけどね、いいか悪いかという判断って。多分こういうのは学校でとったんでしょう。そうすると、学校の中でみんなが書いているからそうやって書いておけという話もあるんだろうけど、親御さんの意見というのも書けというか、聞き漏れてくる話の中にはあるわけですよ。本当にあんなことをやっておってとかいう話が実際、僕の耳に入ったこともありますし、だから、それはそれでとずうっと思っていたんです。ですけど、本当に親御さんたちはそう思ってみえるんですかね。

○鈴村教育委員　センター方式はもちろん経験していないんですけれども、多分、みんな大中に通っているお子さんたちは、センター方式だという感覚で通っていないと思います、授業の流れはそういうもんなんだと思って。それぞれの教科ラウンジがあって移動があるということが

センター方式なんですけど、どこの学校でも９教科中の４教科ぐらいしか教室で受けないんじゃないですか、国語と英語と数学と社会で。結局、技術系のよく言う４教科と、理科なんかもやっぱり理科室に行ったりするんで、そんなに移動というのはさほど変わらないんじゃないかなと。

きょうも、けさも私ここに来る前に１時間目、毎週支援クラスに支援の必要な子のためにちょっとついているだけなんですけれども、朝１時間目の授業はちょっとぎりぎりにしか行けないので、１分、２分前に行くともう静かなんです、廊下全部。もうみんな移動完了して、車をおりるころには渡りを渡って体育館に移動している生徒さんもいるんですけど、もう本当に１分前ぐらいに、済みません、おくれましたぐらいに入ると、その後にチャイムが鳴るという感じで、もうぴったり完了して、誰も間に合わないとかあたふたしている状況では全然なくて、きょうの１時間目だけじゃなくて、ほかの授業にももう１時間入って、週に２時間ぐらいは大体、私は学校に行っているんですけれども、移動が大変だということは、多分書いているけど、どっちかと言えば面倒くさいなあみたいな意見で書いているのだと思います。

小学校でも、近くの小学校なんかは、５分の放課で普通に小学生は移動しているというのも聞いているので、センター方式は多分、子供さんや親御さんに聞いてもそうなんじゃないという意見しか出なくて、センター方式自体は先生の問題。でも、先生方も逆に言えば中学校は教科の先生なので、多分すごくうれしい設備があるところじゃないのかなと私は思います。それが今、余り生かされていないだけではないのかなと。済みません、勝手な話ですけど。

○鈴木町長　教育長、どうなの。

○長屋教育長　物すごく教育をするのに恵まれた、ハード面である。残念ながら、それが十分生かされていないということも、この報告書でわかるように生かされていないということも事実かなあと。じゃあ、再度、生かすようにするにはどうしたらいいのか。これはさっき出てきた何が、教科センター方式だろうとそうじゃなかろうと教員の授業に対する力を高める、分析力ということを先ほど藤田金生委員がおっしゃったんだけど、全くそのとおりだと思うんです。子供たちがいかに食らいついてくるような授業にするために頭を働かせて知恵を絞るのか。大体、子供で勉強が嫌いだというのはまともですわねと僕は思うんです。勉強は余りやりたないなというのはまともである。その中で、あっ、この勉強って何だろうなあという、そういう思いを子供にさせるために教師がおるわけで、それをするためには、本当にすぐれた環境を生かし切れていないことはやっぱり反省すべきだなと。

それから、ブロックで子供たちが一生懸命やって、大体子供で動くから、先生は余り大変じゃなくて楽じゃないかなと先ほど水谷委員がおっしゃったのだけど、これは僕、ちょっとそういう認識ではない。

○水谷教育委員　じゃなくて、ちょっと見えない部分では……。

○長屋教育長　恐らく、ちょうどお釈迦様の話でいくと、孫悟空が棒を振り回して世界の果てまで、ざまあみやがれということで飛んでいく話ありますわね。ところが、それはとんでもない話で、孫悟空さえもお釈迦様の手のひらの中におったというような物語があって、恐らくその中には、子供たちにブロックでつけさせたい願いを持って取り組ませるに当たっては、かなり先生方に負担がかかっていることも事実ではないかなと思うんです。それが、つくっていく過程ではおもしろいけれども、それが定着していく過程で、今度は教職員の異動等の中でちょっとうまく伝わらない面があるんじゃないかなと、そこが問題かなあという気がするんです。ですので、ブロックは確かにいいことはいいけれども、先生の教材研究の時間を確保という兼ね合いの面でバランス感覚というか、それが大事かなあと。

それから、ブロック活動の中で育つ人間関係というのは、確実に将来的には地域のコミュニティーをつくっていく上でプラスになっていくんじゃないかなと思っていますね。今、そういうもので町の中で何があるかというと、例えば防災関係のやつを見ていると、自分の仕事を持ちながらも町の防災のために頑張るような組織、これなんかにはあらわれていると思うんです。そういうものも、将来的にはここから育っていくというふうになってほしいなあという思いもあります。ちょっと違っていたかもしれんですけど、以上です。

○鈴木町長　ありがとうございます。

平岡君。何か御意見ないですか。

○平岡生涯教育部長　直接現場におる人間ではないものですからわかりませんけど、一つは、先生も大変だと思うんですけど、子供は先ほど言ったように順応性があるものですから、そちらのほうは何とでもなっていくのかなと思うんですけど、逆に言えば、我々大人がその環境に順応できていないのかなと思ったりします。そうするとやっぱり、教育長が言われたように、立ち上げていくときというのは、伸び代がいっぱいあって何でもやれる、楽しいなということなんですけれども、やっぱりそれを守っていこうとすると少しつらくなってくるのかなというのがあるのかなと思います。

石橋をたたいて渡るというような言葉がありますけれども、それはそれで大事なことかと思いますけれども、しっかり方策を練ってという、ただ、やはりチャレンジしないと次が見えてこないというのがあるのかなと思うんですね。やっぱりそういうところが今少し、漠とした言葉で申しわけないんですけど、そういうところが少し劣っておるのかなと。踏み出すことによって何か生まれてくるものがあるかなと思うんですけど、なかなか今そのあたりが、特に立ち上げのときに見えた先生方がほとんど今は入れかわってみえるというような時期があって、そういう時期も重ね合わせがあるのかな。我々役場でもそうなんですけど、重なりがあって、そ

ういったときに下の者が上の者を見ながら、経験しながら継いでいくというような流れができればいいのかなと思うんですけれども、人的な部分の中ではそういうふうに感じますし、一番はそういう設備は十分整っておるかと思うんですけど、なかなかそれが生かし切れていない。やっぱり教育の第一義は授業中心で、どういうふうに子供たちにはそれを伝えていくかということなもんですから、そこがやっぱり真摯に受けとめていく必要があるのかなと思っていますけれども。

○鈴木町長　社本君は。

○社本総務部長　さっき丹羽委員さんのお話を聞いていて、自分もすごくそう思うことがあります。人事をずっと担当させてもらったんですけど、ほかの自治体の人事担当職員と話をしたときに、採用してみるとみんな同じような人間になるんだわなという声を聞いて、だって、それを採用しているんじゃないのって、余りにも元気な子はちょっと不安だよな、余りにも上手にしゃべる子は不安だよな、あれも不安、これも不安といくと、結局みんな、結果は同じような子ばっかりなんだよなあ。だから、そういう採用をしているからじゃないの、例えば。

それから今、被災地にうちは南三陸町に職員を送っているんですけれど、被災地の復興はすごく遅いってみんなさんざん言うんだけれど、何百年もかけて暮らしてきたものが一瞬の津波によって壊された。それが５年や10年で本当に戻るのって。今、例えば陸前高田市だと埋め立てしていますよね、高台をかさ上げして。２割しか活用は決まっていないと。８割も残してどうするんだって、すごく批判を浴びているんだけれど、でも、じゃあ８年間待っていてって、今の暮らしがあるから高台に家をつくるよって、でも何百年の間には多分ずうっと人口がふえていって、だんだん住みかを求めて奥へ奥へと行ったんだけれど、人口は減っていく時代に今度それは成り立つかというと多分また集まってくる。そうすると、50年、100年先のことを考えないといけないんだけど、どうしても今の自分たちって、すぐに成果だとかいろんなことを言うから、今を今をと求められるととってもきついんじゃないかなあと思うと、今、職員の採用している中に大中の卒業生はいるんですよね。その子たちの５年後、10年後、20年後というのを見られないかもしれないけれど、教育ってすごい長いスパンの中での話なんで、そういうところからいくと、先ほどからも出ているんだけど、今の大人が環境の変化にどうしても自分たちの経験を当てはめるんで対応できない。これは、うちの職場でも一緒です。じゃあ、その方向を合わせればいいんじゃないか。でも、なかなかそれは合わないですよね。

だから、さっき、町長も言われたし、みんなが言われているんだけど、アンケートを見ると悲惨な数字が出ていて、これだけ見たら、もうやめていかざるを得ないんじゃないのって。でも、議会でも言われるんですけど、アンケートとれ、とれと言われるんやけど、アンケートの数字は本当にいいのって、とっても危険なんじゃないのと自分は思うことがあって、やっぱり

僕たち行政マンだとか行政にかかわる方、議員、政治家というのは、アンケートも大事だけど、アンケートとは違うんだけど、今の責任、覚悟において、こういう方向を目指していくんだというところをみんなに伝えていくことも必要なんだろうというふうに思っているんで、そのあたりのところが、こういうものを見させてもらうととっても大事。

ただ、先ほど丹羽委員さんも言われたこの資料のつくりとして、どうしても説明しなきゃという責任感というところで、僕たち役場の職員もなりがちなんですけど、どうしても説得しよう、説得しようということになってしまうところはあるかなあという。ちょっとまとまったことを言えていないんですけど、子供たちに教科センター方式を取り入れるという話を聞いたときに、やっぱりチャレンジなんだという話がありました。子供たちを実験台にするのかという声もありました、実際にね。でも、やっぱり大人としての覚悟、町としての覚悟をどうするかというところで、今、それが求められているときなのかなという気はします。

○鈴木町長　ありがとうございました。

小泉内閣のときに出たゆとり教育がいいともてはやされていた時代から、20年たってみたらどうだったというような感覚になっている部分というのもある。教育というのは、一貫してこの教育方針がいいんだということはなかなか言いづらい部分もあるだろうし、また実際に求めた成果と対価がちょっと違っていたというところも多少あるんだろうということなんですが、この会議というのは何回もやっていただけるんだね。

だから、きょうこうして資料が出たことに対して、今後どういう形で見ていくのか、事を急ぐ必要性はないと思っています。ただ、本当に先ほど丹羽さんが言われたみたいに、変えるところは変えていかないかんかもしれんけど、その変えるのにも、明日から変えるというわけじゃないという部分もあるし、教員の教科センター方式の研修に対しても、本当に二、三週間しかない時間では難しいこともあるし、認識度の低さと認識度の高さというのは、さっき社本部長が言ったみたいに人それぞれの格差もあるしということで、きょう言ったから、きょう何かの答えが返ってくるものではないというのは十分わかっていますので、ただ、こういうことに対して今まで余り討論、もしくはいろんなことを考えていかなかったというのもあるよね。

だから、そういう意味で言うなら、教育長にお願いしたいのは、いろんなデータを集めて、いろんなところからいろんな話をもっともっと聞いてもらって、生の声という、言い方は悪いんだけれども、よくても悪くても、当然この中しかわからないんだから、そういう意味でいうなら、関係者で話し合う場を持ったって僕はおかしくないと思うんです、実際には。

教育委員の皆さん方は、教育委員じゃなくて、一人の例えば水谷さんであり、丹羽さんであり、その人たちがこういうところで話し合いをするという、お題目はそれでいいにしても、みんながそれぞれ立場立場でもう自分たちが思うことを、局内の職員の皆さんもそうなんだろう

けど、やっぱり自分たちが思っていることをみんなはっきり言ってくれないと、こんな大きな問題を我々、たった６人の人間で考えろなんてことは、正直言って到底、僕らもそれだけの器を持っている人間じゃないし、いろんなものをもっともっとデータを集めて、今後、本当に１年ぐらいかけてしっかりみんなで話し合いをしながら、いい方向性に持っていくことが我々に求められているものじゃないかなあということを思っておるんですが、そういう意味で皆さんどうでしょうか。そういう形で、これからこういう会議をちょっと運営させていただければありがたいのかなあと思うんですが、どうでしょう。

○鈴村教育委員　会議もですし、もうちょっとやっぱり学校へ行ってみたほうがいいんじゃないかなと思います。

○鈴木町長　ですよね。

○鈴村教育委員　私も後で知った話で、教育長先生方も後で知った話なんですけれども、先日、ブロックの日というのが大口中学校で、それで、来年からの生徒総会の内容もでき上がっているんですよね。ブロック活動に対してはもう、この間開かれたブロックの日で今までのことを検証して、前の田中校長先生も呼ばれたりとかして、生徒さんたちがこの10年のあり方を検証した上で来年からはこういう活動をしようという立派なものができ上がっているみたいで、前に進んでいるんです、ブロック活動は。

今、話している改善とかというより、まだまだ改善というより足りない部分が、すごい立派な学校があるので、足りない部分がいっぱいなので、まだまだこれからつけ足していく段階じゃないのかなと私は思っているんですね。

なので、今教科センター方式とブロックというのは全然別物であって、ブロックに関しては本当にブロック活動を生徒さんたちが頑張っていて、うちの娘たちにもちらっと見せたんですけれど、こういう会議があるからと。

○鈴木町長　娘さん幾つ。

○鈴村教育委員　うちは、ちょうど統合した時期なんで、22と24なんですけれども、すごいねって、こんなブロック活動になっているんだねと驚いていました。

ついでに、さっきからずっと言いたかったんですけれども、このアンケートの結果も、私の勝手な分析では、１年生はすごい憧れとか希望を持っての答えでいろいろと結構多い。２年生というのは、どこにでもありがちで、一番面倒くさい、ちょうど間に挟まれているし、一番何でも嫌だと言いたいような学年なんで、多分いい意見が少ない。３年生になると、いろいろ自分たちがやってやらなきゃいけないとか、最後に頑張ろうとか、受験もあるしというので、パーセンテージが上がっているのかなと。で見ていくと、先生方のマイナス思考が多いんです。マイナスというよりも、さっきも言ったことと一緒で、先生方がもうちょっとやっぱり掲示物

とか自分の好きな本を教科のラウンジに置いてもらうとか、そういう工夫が足りないのにこんなふうに書いちゃったら、自分ができてないよと認めているようなものかなというように私は思いました。

○水谷教育委員　職員というのは、先生方が子供たちのことを思ってどう感じていますかという結果らしいんですね。だから、先生自身の思いではなくて、46ページにあるんですが、アンケート対象者として職員とある結果は、教職員の手応えとして生徒はどのように感じているかを推察し、答えたものですということなので、先生本人としてのアンケート結果ではなく、先生が生徒がどう思っているのかなということを思って答えた数字ということなんです。

○鈴木町長　ということですか、天野君。

○天野学校教育課主幹兼指導主事　はい。

○鈴木町長　先生がそう言っているわけじゃないの。

○天野学校教育課主幹兼指導主事　はい。

○鈴木町長　日本人の悪いところで誰が悪者になるという話になって、決めないかんようなところがあるかもしれんけど、今の出ている御意見を聞く範囲内でいくと、本当に一度、こういう場で言えない部分もあるだろうし、本当に非公式な部分で肩の力を落としてどうだこうだという話を、座談会をやった方がいいような気がするんだけど、どうですか、教育長さん。こういうことを一遍やったら怒る。

○長屋教育長　いや、怒らないですよ。

○鈴木町長　一度、きょうは時間もそろそろということでありますので、もう一度この資料を皆さん持って帰っていただいて、我々の知らん資料も私のほうにも頂戴をして、もう少しみんな同じようなレベルに立って、一、二回学校へ行って見てくることも必要ですし、そういうところもやっぱりちょっとやって、あなたたちがとるんじゃなくて、例えば教育委員の皆さんが行かれますよとか、いつ行くかわからんけどというような形、きょうは教育長が行くよという話で、形じゃなくて、そういうふうにとってくれて、それをやった後に一度また皆さんで集まって、次の方向性というのか、いろんなものも本当にいい方向性になるように考えていったほうが私はいいと思いますが、委員の皆さん方いかがでしょうか。

（挙手する者なし）

○鈴木町長　よろしいですか。

　じゃあ、そんな形でこれからこの委員会は進めさせていただきますので、実践と検分を入れながらやっていくという形でお願いをしたい。これが本当に将来の子供たちの大きな礎になっていけばいいのかなと思っていますので、最後、倉知君、現場として何か言っておかないかんことだけ話ししてください。不平不満でも何でもいいよ。

○倉知学校教育課長　不平不満はないですけれども、保護者の立場に立てば、すぐ目の前の受験という目標があるものだから、先ほど社本部長が言われたように、長い目で見ることがなかなか難しい環境に置かれている大人もあるんだなあということは感じています。以上です。

○鈴木町長　全てをよくしようということは、決して我々の人間社会ではできないということでありますけど、多くの皆さん方が満足していただけるような結果が出るような、これからこの委員会としての活動をもう少し皆さんのお力をおかりしながら進めてまいりたいと思っておりますので、事務局のほうとしましてはそんなような形をとっていただけるとありがたいと思っています。

長時間にわたりましていろんな御意見いただきましてありがとうございました。きょう、皆さんからいただいた御意見の中には、僕も正直言って目からうろこもありますし、いろんな意味でこれからの教育方針も考えていかなければならない、そしてまたすごく大きく変化をしていくこの日本という国の中で子供たちをどう育てるかということも考える必要性があるということでありますので、引き続き委員の皆さん方には協力という面で、いろんな面で、教育だけじゃなくて、人間関係いろんなことの中で御意見を頂戴しながら、新しい方向性を見出してまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いを申し上げて、閉会の御挨拶にかえさせていただきます。

事務局のほうにお渡ししますので、よろしく。

５．その他

○吉田政策推進課長　ありがとうございました。

では最後に、その他へ移らせていただきます。何かございましたら御発言を願いたいと思いますが、いかがでしょうか。

（挙手する者なし）

６．閉会

○吉田政策推進課長　では、これをもちまして、平成30年度第１回大口町総合教育会議を閉会させていただきます。委員の皆様には、長時間にわたりありがとうございました。

（午前１１時２２分）